The Membership of the National Museum of Modern Art, Kyoto

京都国立近代美術館

# 友の会会報

2007
EARLY AUTUMN
第15号

麻田　浩
御滝図（兄に）
1990年
東京オペラシティアート
ギャラリー蔵

展覧会の見どころ

## 没後10年　麻田浩展

7月31日[火]－9月17日[月・祝]
休館:最終日を除く毎月曜日
毎金曜日および8月16日(木)の大文字・五山の送り火の日は
夜間開館(午後8時まで。但し入場は午後7時30分まで)

### 没後 10 年　麻田浩展

伝道者は言う。
空の空、空の空、いっさいは空である。
日の下で人が労するすべての労苦は、
その身になんの益があるか。
世は去り、世はきたる。
しかし地は永遠に変わらない。

これは、『旧約聖書』のなかの「伝道の書」第一章の冒頭部です。麻田　浩（1931-1997）という画家を紹介するにあたり、はじめからこうした文章を引用するのは意外に思われるかもしれません。けれども実は、この一節を、麻田は自ら画業の集大成だと語る 500 号の自信作《地・洪水のあと》(1985-86、当館蔵）のカンヴァス裏面に、フランス語で記していたのです。

麻田は初期には、当館で開催した「現代美術の動向」展（1965 年）にも、アンフォルメルの前衛絵画を出品し、その後も新制作展をはじめ数多くの展覧会にシュルレアリスム風の作品を発表するなど、当時の新しい美術動向を果敢に取り入れた作家として知られていました。しかし、1971 年から 11 年余のパリでの活動を機に、一転してヨーロッパ絵画に脈々と流れる宗教的な主題に感化を受け、《地・洪水のあと》のような、現代においてそれら古典絵画とも対峙する、スケールの大きな油彩画に挑戦してゆきます。さらに、同時に着手した銅版画制作も高く評価され、パリをはじめドイツやベルギーなどでも個展が開かれ、国際作家として活躍しました。

1983 年に帰国後は、ふたたび京都にアトリエを構え、滞欧時につかんだ「原風景」という一連の心象風景をさらに深め、宗教的主題と過去の「記憶」の集積ともいうべき重層的なイメージを融合、独自の絵画世界を開拓しました。高橋たか子や松本清張、中上健次らの小説などの表紙画にも採用され、麻田作品は多くの人に親しまれています。

このたびの回顧展は、没後 10 年に際して、その足跡の全容をふり返るはじめての機会であり、代表作はいうまでもなく、最初期の初公開作品から絶筆までを網羅するほか、表紙画の仕事や自筆メモ、現在も龍安寺近くに残るアトリエも再現し、その人と作品のすべてを紹介いたします。

山野英嗣
（当館主任研究官）

麻田　浩
地・洪水のあと
1985-86　当館蔵

美心短信

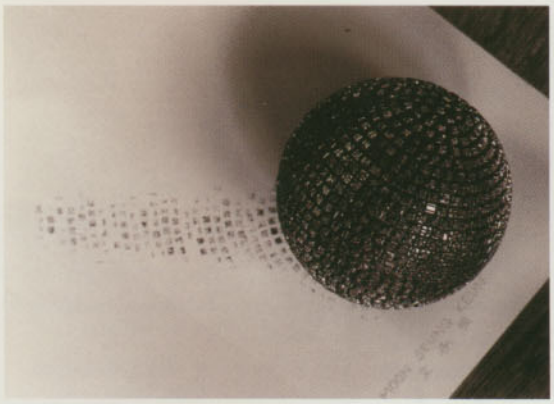
# 文承根+八木正　1973-83の仕事

8月7日[火]－9月17日[月・祝]
休館日その他は左頁と同じ。

八木　正
SEVEN PIECES YELLOW
1980　千葉市美術館蔵

京都を拠点に活動し、1980年代初頭に惜しまれながら早世した二人の美術家、文承根（ムン・スングン 1947-82）と八木正（やぎ・ただし1956-83）の作品展を開催します。この展覧会は、京都国立近代美術館と千葉市美術館の所蔵品のみで構成された小規模な所蔵作品展という性格を持っています。

京都国立近代美術館は、5年前よりご遺族の相談をうけ、文承根の作品の一部を収蔵し、また残された作品の保管と、現代美術の研究を熱心に行っている国内の美術館への情報提供に協力してきました。文承根は、1960年代後半からほぼ独学で美術表現を開始し、主に関西での公募展への出品・受賞を経て徐々に活躍の場を広げていきます。彼の手がけた作品は版画・立体・水彩画・写真・映像など多岐に渡りますが、1970年代当時の現代美術が直面していた様々な課題に真摯に取り組んだものと言うことができます。無数の金属製の活字印が全体に取り付けられたオブジェ《活字球》（1973）について作家が述べた言葉、「このできあがった作品を『版』とみなし、インクをつけて紙の上にころがし版画として提示した。この種の版画はゲンミツな意味でいうと二度と同じ作品は出来ないので従来の版画の一つの要素である複数性はないが、やはりプリントであることにはまちがいない」「私は版画というものは、その制作プロセスにおいてどうしても「版」というものを通過せねばならないというシステムの中にこそ、何かがあるのではなかろうかという点に興味を抱いている」、これらは版画の本質に対する怜悧な問いかけとして今なお有効でしょう。また本という発表形式を採用するなど、システムや制度に対する問題意識が一貫してうかがえます。



文承根　活字球　1973　当館蔵

千葉市美術館は1997年に開催した展覧会「超克するかたち」で八木正を取りあげたのを機に、ご遺族の手で大切に保存されてきた作品を積極的に保管し、また展示可能な状態を保つため作品修復に尽力してきました。八木正は京都市立芸術大学の彫刻科で学んだ後、5回の個展を開催しただけですが、強烈な存在感を放つその作品は、当時の関係者から注目されていました。「ふっと、気付くという感じ方が（自然にとけこんで、ほっているようなもの）、好きです。とても小さくて、自分に近しい距離のことがらであっても、時間の被膜が、1枚おちたような、あるとても大きなものへとみちびいてくれるような、かすかな振動がおきはじめ、ぼくが、まわりの世界を対象化するということは、そういったことからはじまります」と語る八木は、木という素材の質感と存在感の微かな差異にこだわった制作に取り組み、新たな展開と可能性を期待されていたなか、白血病のため26歳で急逝しました。

今回の展覧会では、文承根の作品は4階コレクション・ギャラリーに、八木正の作品は1階ロビーにそれぞれ展示されます。この展覧会は、作品のコレクションと展示という、美術館にとって最も基本的で重要な活動の成果報告でもあります。

牧口千夏
（当館研究員）

## 友の会よりのご案内

一般に日本の美術館では、自館での展覧会を観賞する人々に対して、観覧券、団体観賞券、前売券等を発売し、友の会の会員に対しては会員証を発行して、その提示によって展覧会を観賞できるというシステムが長く続いてきました。(ただ、友の会に入会いただくと、当館の場合は、国立美術館の常設展や一部館の企画展、在近畿の国立博物館の常設展を団体料金で観賞できる特典があります。)そして、他館の観賞は、各館の設定する入場料を払うのが通常でした。

このことは、現在も基本的には変わりませんが、近隣の美術館同志の相互連携が、より活発に、より有効に出来るよう、新たな試みが始まっています。当館が本年から始めた**細見美術館**との**相互優待**も、その試みの一つです。具体的には、当館を観賞後、細見美術館を訪ねる場合、当館の観賞券(いわゆる、半券)、友の会会員の場合は会員証を受付で提示されると、細見美術館を**団体料金**によって観賞することができます。細見美術館を先に訪ね、その後当館に来館される場合も、同様の優待を受けることができます。

また、細見美術館の友の会主催で開催される催しに、当館の会員が参加ご希望の場合は、当館の友の会会員証を持参の上、参加、あるいは事前予約等が可能となりました。

この新しい試みを有効にご利用下さい。

なお、細見美術館は、京都市左京区岡崎最勝寺町6-3, TEL:075-752-5555です。京都会館、みやこめっせの川をはさんだ西側です。休館は毎月曜日(祝日の場合は翌日)

## 友の会の催し

### コンサート(京都市立芸大生による)

#### ＊＊＊ オータム・ナイト・コンサート ＊＊＊

日時：平成19年11月17日(土)　午後6時開演
会場：当館1階ロビー
曲目：弦楽四重奏(曲目は未定)

#### ＊＊＊ クリスマス・コンサート ＊＊＊

日時：平成19年12月22日(土)　午後6時開演
会場：当館1階ロビー
曲目：管・打楽器を中心に、楽しく。

● 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
● 夜間開館
4月15日(金)―9月2日(金)までの企画展開催中の金曜日
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
● 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日に当たる場合は、翌日が休館)、及び年末年始
(開館時間、休館日は臨時に変更する場合があります)

※お車でお越しの場合　**岡崎公園駐車場(地下)**をご利用の**有料**入館者は、**駐車場の割引**(1台1名)を受けられますので、**駐車券をお持ちの上**お越しください。

● 交通案内

独立行政法人国立美術館
**京都国立近代美術館**
The National Museum of Modern Art, Kyoto
〒606-8344　京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL. 075-761-4111
テレフォンサービス 075-761-9900
ホームページ　http://www.momak.go.jp